母の故郷(ふるさと)②

――福永津義・人間(ひと)とその仕事――

高橋さやか

（承前）

聖書にもとづいての神への思惟は、事に当り時に応じて（不断に手もとから離さない）聖書をひもとき、志しては創世記から黙示録までの通読をくり返すことにおいて、たゆみもなく深められた。聖書をくり返し熟読することによって自らのうちに啓示され鏤刻されて深まる信仰、ただ聖書に拠るところから由来するとも思われる超教派的な心情、聖書の中でも四福音書を大切に思い、四福音書の中でもヨハネによる福音書を最も愛していたこと、……津義の人格を特徴づけているキリスト教の、というよりキリストイエスその人のうけとめ方は、今日改めてよみ返すことによってうかがわれる「逆境の恩寵」の著者のあり方に似通い、その父の娘にまぎれもない、という思いがする。

実際に、「コリント人への手紙」の文言に納得しかね

る思いがあって母にただしたとき「それは、パウロの手紙だから、……あなたのおじいさま（規矩を指す）も、これはパウロの考えであって、イエスではない、とおっしゃったことがあったよ。……別の個所だったかもしれないけれど、とにかく、パウロのことばの中には、パウロの考えでそう言っているところもあるのね。」という風に答えてくれたことがあった。

津義のきもちの中で、聖書はもとより旧新約すべての書を尊重すべきには違いないが、しかもなお、絶対であるのはイエスのみ、というところがあったと思われる。彼女の日常生活を支える思考や行動の規準は聖書にあり、その聖書の理解・うけとめの規準は、必ずイエスに求められた。

このような信仰のあり方、生活者としての態度は、すべてその源流を、やはりその父規矩に発するものと見て間違いないと考える。

母校活水がそうであったし、規矩の知友にもメソジストの人々が多かったから、一応教派的にはメソジストに所属していたのは自然である。活水・幼稚園師範科を卒業したのが一九一二（明治四五）年、二年母校にのこって教鞭をとり、次いで福井メソジスト教会附属栄冠幼稚園に主任保姆として赴任した。同教会に牧師として赴任した福永盾雄と結婚したのが一九二〇年、盾雄は関西学院神学部出身、思うところあって福井教会在任一年一一ヵ月を以て教会を退き、夫妻携えて朝鮮開城市に渡ったが、教会を退いたあとも、所属教会はずっとメソジストであった。

ともあれ、結局要するに教派に執するきもちは、津義においてあまり強くはなかったといえるようである。

津義の母うた（信子）は、同志社に学んだことがあり、同志社の人脈の中には縁（えにし）につながる人々も少くないから、組合派もまた、親近な教派であった。

後半生において、バプテスト・ミッション立である西南学院の系列校に職を奉じ、小さいながら一校の責任を負う立場になったとき、「人が再婚するとき、再度の式をあげることも素直なあり方だ」といって信仰生活四十

年を過ぎた身で（バプテスト教会に所属するために）バプテスマをうけたのも、もともと「信仰は一つ」という超教派的な心情が、却ってこだわりもなく、再度信仰の証しを立てる形式に従ったものと思われる。

当然、ともいえよう、教派的教条的神学論争は好むところではなかった。

「イエスはどうなさったか」

「イエスはこうおっしゃっている」

仕事にかかわっても、生活的な問題に当っても、イエスに規範を求める津義の態度は、自然で、極めて自由な、ある意味でユニークなものであった。

素直で素朴な、真摯で熱心な（それ故に自由で自分独自な）聖書に忠実な信仰。それが、父母の遺産としてうけ継いだ、津義の信仰であった。

Ⅱ　系譜……その二

福永津義の、教育者・保育者としての立場は、当然、キリスト教教育者の立場であり、教育学の系譜からいえば、徹頭徹尾フレーベリアン、ということになる。

教育者として、津義に強烈な影響を与えたのは、先ず、活水の創立者、エリザベス・ラッセルである。

「ラッセル先生」とよぶとき、その声音には何ともいえない、ひとをなつかしむ切実な思いがひびいた。

精神的に如何にも骨太な、豪気な、パースナリティの持主が「ラッセル先生」であった。それはまた、津義自身の母うたに一脈通うものであり、教育者として世に立ち、動揺のない信念によって毅然と事に立ち向い、率直でしかも寛大な態度を持していたのは、母ゆずりでもあり恩師ゆずりでもあるように思われる。巧まずに折にふれて見せるユーモラスな一面も、培われた根は、同じところにあるのであろう。

「ヤング先生[註]は、優しい方でね、……ラッセル先生は、

大きな方だった」とも言っていた。

人格形成における師がミス・ラッセルであるのに対して、学問の師は、高森富士である。高森富士を通して、生涯傾倒することになったフレーベルが、津義の前にその全容をあらわしたのである。

高森富士（藤とも）は一八七七（明治一〇）年四月生れ、一八八四（明治一七）年活水の小学部に入学した活水生え抜きの先輩になる。津義は一八九〇年生れであるから、一三歳の後輩、奇しくもというべきか、津義が活水に入学したのも、一八九七年小学部に、であるから、丁度一三歳おくれて富士のあとを歩んでゆくことになった。

はじめ富士は、幼稚園の教師になることについてあまり進んだきもちになれず、熊本に出て英語の教師になろうと考えていた、という。それが、一九〇五年、幼稚園教育の専門家としてメリー・コーディが着任したことによって、富士の進路は大きく変ることになった。コーディは、活水における幼稚園教育の推進に当って、熱心に富士の協力を求め、やがて、富士の幼稚園教育者としての素質の優秀さを見抜いて、アメリカ留学の道を開き強くそれを推し進めた。富士は一九一四年シカゴ大学に、また一九一五年～一六年にはコロンビア大学に学び、一六年にバチェラー・オヴ・アーツを、一九一七年にはマスター・オヴ・アーツの学位を得た。このようにして、日本におけるキリスト教保育の草創期に、その歩みを先進国に劣らぬ水準に築き上げた、――そう言い得る実績をもたらした、その抜き難い主力をなした高森富士の存在が後進に仰がれることになる。

活水に幼稚園がおかれたのは一八九五年からであり、幼稚園保姆養成科のちの幼稚園師範科設置は、コーディ着任の一九〇五年であった。富士は、小学部、予備科、初等科、中等科、高等科を経て、コーディの助手をしながら幼稚園師範科のコースも学んだ。

津義が幼稚園師範科で高森富士の教えをうけたのは、富士の渡米留学前であるが、コーディの指導もあり、フレーベルの「人の教育」と「母の遊戯」は、すでにその

講義の最も主要なテキストであったと推定される。それは或いは原著からの英訳本であったろうか。（教育学のみならず、当時の活水では英語の講義の方が多く、「国文学のほかは、物理であれ、化学であれ、数学であれ、何でも英語で教えられたから、……幾何とか三角とかいっても、ほとんどわからなかったよ」と苦笑しながら津義が語ったことがある。）

「人之教育」「母の遊戯」ともに、（頌栄の）A・L・ハウ編、原田助訳のものを、津義は後年まで大切に用いていた。これらの初版は一九〇九年であるから、一九一〇～一二年を幼稚園師範科に在学した津義は、辛うじて、在学中に日本語訳を手にしたことかとも思われる。

「SONGS AND MUSIC OF FROEBEL'S MOTHER PLAY」――スザン・E・ブロウの英訳本が、いま、筆者の手もとにのこっている。これは在学中のテキストであったろうか。あるいは留学した富士から送られたものであったのかもしれない。

津義は、さきにも記したように幼稚園師範科卒業後二年母校にのこり、福井市栄冠幼稚園に赴任し、富士の留学中、一時再び母校の教壇に立っている。そしてまた再び栄冠幼稚園にもどっているが、このような間に、富士の学問研究は、卒業後も密接に津義に伝わったと思われる。

津義は、ドイツ語には親しまなかったから、フレーベルの原著に直接当ったことは（少くとも詳細には）なかったと思われるが、（その点よくも悪くも直観的に、とでも言うよりほかはないようであるが）自覚としては真底、フレーベルその人に心酔傾倒するようになる、……しかし、その道すじは、高森富士と、富士を通じてスザン・ブロウによって開かれたものと言わなければならないようである。

富士は、コロンビア大学の児童研究所で、J・デュウィの謦咳にも接し、パティ・S・ヒルとも親しく交わった……ヒルの「幼稚園教育課程」の日本語訳も出しているけれども、ブロウを最も重んじていた。フレーベル教育学の本義を最もよく理解しているのはブロウだという

のが富士の見解で、津義は、師のそのうけとめ方に全面的に同調していた。

日本の保育史――幼稚園教育史の中で、フレーベルは官学系でも私学系でも一応は宗本として重きをなしている。よく知られているように一八七六（明治九）年、東京女子師範に最初の公立幼稚園が設置された時、招かれて指導に当ったのは松野クララ夫人――フレーベルに直接教えをうけた一人に数えられる人であった。これに対して、私学――活水にして、頌栄にしろ、保姆養成校をひらいたミッションスクールは同じフレーベル思想とはいっても、アメリカ経由のフレーベルであったと見ることができるであろう。前述のA・L・ハウ編の「人之教育」も、英訳からの重訳である。（ハウあてのフレーベル未亡人ルイーゼ・フレーベルの感謝状をも巻頭におく「人之教育」は、精度の高い訳として評価されるものであろうけれども）

アメリカを経由したフレーベルは、恐らくかなり実用主義的な闊達さ、あるいは平明さを帯びることになったのではないだろうか。

デュウイがフレーベルを一面相当に高く評価し、他面、強く批判していることは、幼児教育を学ぶほどのものにはよく知られているところであろう。P・S・ヒルは、デュウイの思想の、幼稚園教育実践の場におけるよき実現者であったと考えられる。彼女の考案になる中型積木――第五・第六恩物の拡大――は、たしかに、形の上からもフレーベルの評価とフレーベル批判・フレーベル打破の考え方をともに具体化したものと見ることができそうである。小型積木で、机上に小宇宙を観念する、というような志向をもつ恩物から、子どもがそれで遊ぶとき、自分の身体・筋肉を駆使し、活動の場を構成したり、構造力を養うような、実際的実用的な教材として、「ヒルの積木」は、たしかに恩物の枠を打破発展させたものと言えるのであろう。

フレーベルの教育理念は、言うにも及ばず「人の教育」（「人間の教育」）にあるには違いないが、その実践的教材として「恩物」をとるか「母の遊戯」（「母の歌と

愛撫の歌」）をとるかにおいて、理念のうけ容れ、また展開に、実践の姿勢に、かなりのちがいが生ずるのは、筆者ばかりであろうか。

「恩物」は、まさしく教具教材である。固定的な実在である。そこにそれがある以上、眼前にある実物について批判することは、如何にも直接的な、的に中る批判となり易いに違いない。事実フレーベル批判のほとんどは「恩物」批判に通じる。曰く象徴主義、曰く観念主義、技巧訓練への偏向、……実用主義哲学が、それを葬ろうとするのに不思議はない。

一方で、「恩物」を重視しつづけるフレーベル主義も教育・保育界で全く失われたわけではない。

しかし、スザン・ブロウや高森富士は、明らかに「恩物」に優って、「母の遊戯」のうけとめに意を用いたと考えられる。

ブロウ訳「母の遊戯」は、かなり意訳的なのではないかと思われる。語学に疎い筆者は、言うに甚だ憚り多く心もとないのであるが、その意訳が、逐語的直訳よりも、よりフレーベルの真意に即している、というように、高森富士がうけとめ、そして、津義もそのように解していたふしがある。

スザン・ブロウにしろ、高森富士にしろ、フレーベルの理念は、観念的に空転しているものではなく、生活者人間の、生活そのもの、生きざまそのものにかかわる、したたかな実践理念である、と見定めていたと考えられる。

津義は、まともに、高森富士――スザン・ブロウの系譜……流れを遡って、フレーベルの原泉に没入したのだと思われる。

津義が、幼稚園教育において、幼稚園や教会に繋る母親教育・婦人会活動において、そして、自分自身母親としてのいとなみにおいて、活動のあり方すべてをフレーベルの方法論で充当していた、――まさしく理念・考え方といったものではなく、直接具体的な活動方式、現実処理のし方としてのフレーベル法とでもいえよう――そのあり様は、筆者には極めて特異なものに思われる。そ

れは、幼稚園のカリキュラムに、恩物を使う、とか、「母の遊戯」を保姆養成校の講義や、母の会の講話でとりあげるとか、という程度の、一通りのあり方ではなかった。彼女は、一々現実に、日常的に、子どもとともに試したりしらべたり、工夫して造形したり、創作したり、そして、子ども自身が一人ひとりのその子のやり方で生きるあり様に対応し、子どもと同様な、常に新しい体験に向って感覚器官を、そして全身全霊を展開し伸長させようとする態勢、を維持しつづけた。それが彼女の「フレーベルの流儀」であった。

いずれ、後章でいくらかでも具体的に、津義の「フレーベル法（フレーベルの流儀）」について述べることにしたい。ここでは、その、極めて特異な、しかし、むしろ津義自身の独特の流儀としてフレーベルの真髄に迫りつづけたそのあり様が、やはり、高森富士スザン・ブロウの先蹤をもつものであることを明らかにしておきたかった次第である。

（つづく）

（西南女学院）

註　マリアナ・ヤング女史。一八九七年来任、一八九八年活水女学校（当時）第二代校長となった。